

北米先住民史研究の展開：

シルヴィア・ヴァン・カークの影響と以後の研究の系譜を中心に

田 中 俊 弘

はじめに

2007年5月末にサスカチュワン大学(サスカトゥーン)で開催されたカナダ歴史学会(Canadian Historical Association)では、トロント大学のフランカ・イアコベッタ(Franca Iacobetta)らが企画の中心となって、シルヴィア・ヴァン・カーク(Sylvia Van Kirk、トロント大学名誉教授)の人と功績に焦点を当てたラウンドテーブル・フォーラム(Many Tender Ties: A Forum in Honour of Sylvia Van Kirk)が開催された⁽¹⁾。それを機に、彼女の「先住民と白人移民の関係史における草分け的研究」を起点として捉え直したアンソロジーを編む企画が生まれ、それは2012年にロビン・ブラウンリー(Robin Jarvis Brownlie)とヴァレリー・コリネク(Valerie J. Korinek)の編著で完成した⁽²⁾。

ヴァン・カークは寡作の研究者であり、その単著はロンドン大学に提出された博士論文を土台とした『優しい絆(Many Tender Ties)』(1980年)のみである⁽³⁾。しかし、同書が学界に与えた影響は極めて大きく、だからこそ、30年前後の時を経て、その業績を再評価するフォーラムが開かれ、アンソロジーが編まれたのである。

彼女が博士論文に向けた研究中にしばしば尋ねられた問い——「毛皮交易の世界にどんな女性がいたというのか？」——が、その研究の革新性を象徴している⁽⁴⁾。それまでのカナダの毛皮交易史は、「未開」の地に入り込んでいく白人毛皮交易人の歴史であった。白人女性は渡航・入植を禁じられていた

ために現地には存在しなかったし、先住民男性は、交易のカウンターパートとして描かれていたものの、先住民女性は完全に視野から外れていた。ヴァン・カークの盟友ジェニファー・ブラウン (Jennifer S.H. Brown) によれば、彼女たちが登場する以前の毛皮交易史の代表的研究者だったリッチ (E.E. Rich) は、ヴァン・カークの博士論文査読審査員の1人であったが、毛皮交易史における女性を研究する意義について、リッチを完全に納得させられなかったようだと言及している⁶⁾。それは、社会史の重要性をめぐる根本的な認識の差異であったに違いない。ともあれ、ヴァン・カークは博士号を得て、後にトロント大学で専任教員の地位を手に入れた。そして、いわば新しい「学派」の創始者となったのだ。毛皮交易史において、イギリスやカナダ東部のメトロポリスに足場を置き、西部を「周辺」として位置づける研究⁶⁾とは別に、地域の視点から、それまで軽視もしくは無視されてきた先住民や女性に焦点を当てた研究が、彼女以降に見られるようになったのである。

本稿は、まず、日本における北米先住民研究の状況を俯瞰した後に、ヴァン・カークの研究の史学史的な位置づけを確認するとともに、その後、今日に至るまでの研究動向を概観する。1980年以降、北米先住民史、毛皮交易史の分野では多彩な研究が進められてきた。その全てを網羅するのは不可能だが、少なくともその潮流や代表的な研究の把握を目指す。

1. 日本における先住民・先住民史・毛皮交易史研究

日本における北米先住民研究は、主に文化人類学者・民族学者によって耕されてきた。もちろん、歴史的な叙述も多く含まれるが、その研究関心はあくまでも民族そのものに向いている。たとえば、綾部恒雄／富田虎男／スチュアート・ヘンリ編『講座世界の先住民族 フェースト・ピープルズの現在 07 北米』(明石書店、2005年)は、人類学者が中心に編んだアンソロジーの一例である⁷⁾。その他、阿部珠理の諸研究(『アメリカ先住民: 民族再生に向けて』角川書店、2005年など)や、教育から法律まで幅広く関心を向けている松井健一『北米先住民族の文化と主権』(筑波大学出版会、2013年)なども、現代の先住民が抱える問題を考察する上で示唆に富んでいる。

カナダに関する著述では、まず、学者による研究書ではないが、その影響

を考えれば、本多勝一『カナダ＝エスキモー』(朝日新聞社、1963年)を無視できない⁽⁸⁾。アカデミズムの世界でも、新保満(『カナダ＝インディアン：滅びゆく少数民族』三省堂新書、1968年)以降、煎本孝(『カナダ・インディアンの世界から』福音館日曜日文庫、1983年)らの研究を経て、多様化が進んだ。なお、啓蒙的な書としては、浅井晃『カナダ先住民の世界』(彩流社、2004年)が包括的で特に参考になる。

ちなみに、「エスキモー」という語は、他の先住民の言葉で「生肉を食べる者」の意味があるとされ、1970年代にそれが差別的だと判断されたために、カナダでは現在は「イヌイト／イヌイト」が使用されている。ただし、文化相対主義の視点に立てば、そもそも「生肉を食べる」のが差別的なのかという議論もありうるし、実は「エスキモー」が「カンジキ(雪靴)を編む人」に由来するという説もある⁽⁹⁾。そのため今日でも、アメリカ合衆国やロシアではエスキモーという呼称が一般的に使用されている。

また、「インディアン」という語も、カナダでは「ファースト・ネイションズ」、アメリカでは「ネイティブ・アメリカン」が使用される傾向にあるが、後者は、「エスキモー」など他の先住民を含んだ総称である。また、先住民居住区も「インディアン・リザーヴ」(アメリカでは「インディアン・リザーヴェーション」)の呼称が残るし、カナダの先住民政策を担当するのは、「インディアン問題・北方開発省」(ただし現在、その通称は先住民問題・北方開発省)である⁽¹⁰⁾。差別の問題と先住民自身のアイデンティティの在り方も絡んで、呼称1つとっても注意を要するが、ともあれ、「先住民(Aboriginal people)」がファースト・ネイションズ(インディアン)、混血のメティ(メティス)⁽¹¹⁾、そして極北のイヌイトらを含む最大の最大なカテゴリーであり、「インディアン」のみの代替語句としては時に不適當だという点は強調しておきたい。

多くの人類学的研究のなかでは、岸上伸啓のイヌイトを中心とする研究(『カナダ・イヌイトの食文化と社会変化』(世界思想社、2007年)など)がその代表格と言えよう。イヌイトについては、大村敬一『カナダ・イヌイトの民族誌』(大阪大学出版会、2013年)などもある⁽¹²⁾。他にも、カナダ西海岸の先住民の生業である漁業を調査した立川陽仁『カナダ先住民と近代産業の民族誌』(御茶の水書房、2009年)や、「カナダの水俣病」を扱った『カナダの元祖・森人たち』(あん・まくどなど、磯貝浩、Asahi Eco Books、2004年)、先住民の文化変容を検証した齋藤和枝『北西海岸先住民の文化変容：伝

統、芸術・芸能、観光産業』(彩流社、2011年)など、現代を中心とする事例研究も一定の蓄積がある。フィールドに入りこんで調査研究を進める山口未花子の『ヘラジカの贈り物 北方狩猟民カスカと動物の自然誌』(春風社、2014年)も人類学分野の新たな成果である。

その他の分野では、たとえば、加藤普章が政治的なアプローチを展開してきた(『多元国家カナダの実験：連邦主義・先住民・憲法改正』(未来社、1990年など)。教育学領域でも、先住民の教育に関心を向ける広瀬健一郎の研究もある⁽¹³⁾。しかし下に述べる歴史領域と同様に、文化人類学以外の分野では、必ずしも実り豊かとはいえない。

アメリカ合衆国の先住民史については、富田虎男(『アメリカ・インディアンの歴史』雄山閣、初版1982年、第3版1997年など)の諸研究を抜きには語れない。物理学者・藤永茂(アルバータ大学名誉教授)の著作(『アメリカ・インディアン悲史』朝日選書、1974年など)も、先住民史に対する日本人の見方を涵養する上で貢献してきた。アメリカ合衆国の公民権運動やヴェトナム戦争を経て、ちょうど1970年代から、北米におけるマイノリティの扱いに変化が生じ、それに伴って先住民についても異なる視覚からの研究が開始されたが、あまり遅れることなく、日本でも同様の切り口で先住民史を描く研究・著述がみられるようになったのだ。『優しい絆』と類似した視点からの論考としては、時代を下って、白井洋子「先住民女性にとっての『新世界』—植民地主義とジェンダー」(有賀夏紀・小椋山ルイ編『アメリカ・ジェンダー史研究入門』青木書店、2010年)などがある。

毛皮交易については、人類学の一環で環北太平洋地域に焦点を当てた研究が散見される(たとえば、大塚和義編『北太平洋の先住民交易』思文閣出版、2003年、岡田宏明・岡田淳子編著『北の人類学：環極北地域の文化と生態』アカデミア出版、1992年所収の小谷凱宣論文「北方民族と毛皮交易：文明のクロス・ロードと文化変容」など)。

カナダの先住民史・毛皮交易史については、木村和男の研究(『カヌーとビーヴァーの帝国：カナダの毛皮交易』山川出版、2002年、『毛皮交易が創る世界：ハドソン湾からユーラシアへ』岩波書店、2004年、そして『北太平洋の「発見」：毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』山川出版、2007年)が代表的である。元々は経済史の研究者として、カナダの連邦結成や帝国連邦運動に関わってきた木村が、メイティや毛皮交易の歴史研究に転じたのは、「G

8メンバー中でカナダだけが、他国を侵略・略奪した過去を持たぬ唯一の国」だった点はその美德だったからであり、「先住民を暴力的に駆逐して大陸の支配者となったのは、北米、中南米を問わずヨーロッパ人の『原罪』であり、カナダも残念ながら例外ではありえないが、カナダ西部では毛皮交易を背景として、短期間ながら、例外的なほど美しいインディアン=白人間の家族関係が成立」したからであろう⁽¹⁴⁾。上記の3冊のなかでは、一般向けに書かれた『カヌーとビーヴァーの帝国』において、ヴァン・カークの影響が最も色濃く現れている。

細川道久らが展開する「白人研究(Whiteness Studies)」⁽¹⁵⁾も、逆説的だが、境界線の外側にいる先住民をその視野に含む。『白人支配のカナダ史：移民・先住民・優生学』(彩流社、2012年)では、メイティのアイデンティティがむしろ政府の政策によって作られたとするボニータ・ローレンス(Bonita Lawrence)の論考を踏まえて、非白人たる先住民に向けた政策を検討している。また、高村宏子の『北米マイノリティと市民権：第一次大戦における日系人、女性、先住民』(ミネルヴァ書房、2009年)は、日系人を含むマイノリティの一部として、先住民の市民権獲得のための戦争参加を扱っている。

なお、北米史の枠からは外れるが、森永貴子『ロシアの拡大と毛皮交易：16-19世紀シベリア・北太平洋の商人世界』(彩流社、2008年)も、「ロシア領アメリカ」を含む北太平洋毛皮交易ネットワークを史的アプローチで理解する参考になる。また、メイティと日本の関わりについては、「日本における最初の英語教師」となったラナルド・マクドナルドの物語もいくつか刊行されている(ウィリアム・ルイス著、村上直次郎編、富田虎男訳訂『マクドナルド「日本回想記」：インディアンを見た幕末の日本』刀水書房、1979年、再訂版2011年、今西佑子『ラナルド・マクドナルド』文芸社、2013年など)。

2. 北米の先住民史・毛皮交易史研究—カナダの研究を中心に

アメリカ合衆国を含めた北米全体の先住民史・毛皮交易史の先行研究は、あまりにも多様かつ膨大すぎてまとめられない。しかし、たとえばヴァン・カークの論考が再掲載されているアンソロジー、Susan Sleeper-Smith ed., *Rethinking the Fur Trade: Cultures of Exchange in an Atlantic World* (Lincoln & London: University of Nebraska Press, 2009) は、過去数十年間の研究潮流を知る

上でも参考になるだろう。「1. 毛皮交易が大西洋兩岸の経済関係拡大の一部として発展した過程、2. 毛皮交易が地域毎の経済システムを発展させた理由、3. 先住民がどのように交易過程に影響を及ぼしたのか、4. ジェンダーが異なる経済システムの統合ツールとして果たした役割や19世紀までの五大湖地方で交易の主導権を先住民に握らせた背景」を扱うために⁽¹⁶⁾、スリーパー=スミスは、17世紀の記録から最新の研究までを選びすぐっているのである。クライボーン・A・スキナー(Claiborne A. Skinner Jr.)は同書を書評して、掲載した論考の包括性を高く評価した上で、あえて言えば、カナダの毛皮交易史の祖であるハロルド・A・イニス(Harold A. Innis)についての論考も加えるべきだったとしているが⁽¹⁷⁾、本人も「難癖(quibble)」と述べているとおり、このアンソロジーの目的には必ずしも合致しない。

ピューリッツァー賞候補作になったアン・ハイドの労作(*Anne F. Hyde, Empires, Nations, and Families: A New History of the North American West, 1800-1860*, New York: HarperCollins Publisher, 2011)は、「家族」を統合テーマにして、地理的に実に広範囲な北米西部史を二次文献も巧みに整理しながらまとめあげており、この60年間についての詳細な叙述であり、特筆に値する。

カナダの毛皮交易史の著述で特異な地位を占めるのは、『トロント・スター(Toronto Star)』紙編集者や『マククリーズ(Maclean's)』誌編集長を経てカナダを代表する人気作家となったピーター・C・ニューマン(Peter C. Newman)の諸著作である。一般向け啓蒙書だが、彼の他の著作と同様に多くの読者を獲得している(Newman, *Empire of the Bay: An Illustrated History of the Hudson Bay Company*, New York: Viking Studio, 1989 や *Empire of the Bay: The Company of Adventurers that Seized a Continent*, New York: Penguin Books, 2000 など)。しかし、歴史研究者は、ステレオタイプの英雄や伝説を作り上げるストーリー・テリング要素に力点が置かれた「読み物」にすぎないと批判する。彼の本が出るまでは期待して協力もしたが、絢爛な散文で彩られた単純化されたステレオタイプの物語で、誤謬も多く含んでおり、アカデミック・ヒストリーとポピュラー・ヒストリーの壁の大きさを実感したと、ブラウンは回想している⁽¹⁸⁾。ただし、ニューマンの「ポピュラー・ヒストリー」は、サナデルサーの物語など、『優しい絆』でも扱われる主題が取り込まれ、先住民や女性も毛皮交易の「アクター」として位置づけている点で、「ヴァン・カーク以前」とは明らかに一線を画する。

ここでヴァン・カークの研究について、少し詳細に説明したい。彼女は、それまでの毛皮交易や北米西部を扱った歴史研究では、ほとんど触れられさえしなかった女性を中心に据えて、彼女たち——インディアン、メイティ、そして白人の女性——が毛皮交易社会にいかなる役割を果たしたかを説明し、社会史・女性史の視点で毛皮交易社会を見事に描きだした。白人女性の入植が禁じられた時代ゆえにみられた白人男性とインディアン女性の対等な夫婦関係の時代、その混血の子孫がインディアン妻にとって代わった時代、さらに白人女性の入植解禁によって、インディアン女性やメイティ女性が味わった屈辱、その後の人種間の軋轢、そして、過酷な環境への不適応による白人女性の苦しみ。白人女性の入植は、カナダ西部における農業定住の始まりを告げ、北米毛皮交易時代の幕引きを意味する出来事でもあった。それゆえ、女性と結婚——教会が認める「正式な結婚」と、現地の慣習に従って結ばれる「現地流結婚(Mariage à la façon du pays)」の両方——を中心に据えてその200年を詳細にみていくと、毛皮交易社会の形成から崩壊までほぼ全期間の、ゆっくりとした、しかし確実な時代の変化を読み取れるのである。先住民も女性も、紙に書かれた記録をほとんど残していないので、必然、「白人男性」の残した記録に依拠せざるをえない。そんななかで、多面的にバランスのとれた評価を心がけている。より長期的なタイムスパンで毛皮交易社会の実情と変化を扱っている本書は、まさに社会史研究のお手本であろう。

ヴァン・カークによれば、北米毛皮交易社会における白人と先住民の接触は、一般的なステレオタイプ・イメージとは異なる形で展開した。毛皮交易に関わった白人交易人の多くにとって、一時的ではあれ、先住民女性(インディアンとメイティ)は、本当に愛すべき素晴らしいパートナーであった。それが、先ほど木村の文章で引用した、「例外的なほど美しいインディアン=白人間の家族関係」だったのだ。『優しい絆』(原題では多くの優しい絆 [Many Tender Ties]) というタイトルは、そのような永続的な婚姻が多く長く続いたことを示している。もちろん、さまざまな不幸や悲劇も生じてきた。しかし本書は、そうした出来事も冷静に受け止めて、女性史の潮流に則り、彼女たちを「受け身の犠牲者」ではなく、「能動的な行為者」として描き出すのに成功した。

この研究は、毛皮交易史に新たな潮流を生み出した。もちろん、1980年以降も、白人男性中心の政治経済史としての毛皮交易史研究がなくなったわけ

ではない。しかし、先住民と女性の関与に関心を向ける研究者が着実に増えてきた。カナダでは、30年以上が経った今でも、「彼女の著述を読まずにこの国〔カナダ〕で歴史の学士号を得るのは、おそらく不可能」なほどに⁽¹⁹⁾、ヴァン・カークは研究史上で重要な存在になったのである。

ヴァン・カーク以降のカナダ先住民史・女性史としての毛皮交易史の研究動向については、本稿の冒頭で触れたアンソロジー、*Finding a Way to the Heart: Feminist Writing on Aboriginal and Women's History in Canada* が、この30余年の研究展開を把握する際にも参考になる。そこでは、ヴァン・カークの著作が、白人と先住民の関係について「ロマンチック」かつ「センチメンタル」に語り過ぎていてと批判されてきた点にも言及している⁽²⁰⁾。マルクス主義史学の影響を受けながら、弱者たる先住民の側の主体的行動を強調しているために、結果として植民地における権力関係を軽視しているという指摘である。先住民悲史の側面こそが重要であり、「優しい絆」を強調するのは必ずしも好ましくないということであろうか。

そのような批判を浴びていてもなお、『優しい絆』は、研究史上、画期的で重要な1冊である。*Finding a Way to the Heart* も、ヴァン・カークの著作がアメリカ合衆国やコモンウェルス諸国の研究に今でも影響を与えている点も強調しているし、アメリカ合衆国への影響を説明したジェイムソンの論考(Elizabeth Jameson, “Ties Across the Border”)や⁽²¹⁾、彼女の系譜でニュージーランドのマオリを扱う研究(Angela Wanhalla, “Beyond the Borders: The ‘Founding Families’ of Southern New Zealand.”)、そしてカナダ、アメリカ合衆国、ニュージーランド、オーストラリアの「人種間結婚」観を比較する論考(Victoria Freeman, “Attitudes Toward ‘Miscegenation’ in Canada, the United States, New Zealand, and Australia, 1860-1914”)も掲載している。

そのアンソロジーの主たる執筆者の1人で、ヴァン・カークの長年の盟友でもあるブラウンも、先住民女性の果たした影響に着目する研究者であり、Jennifer Brown, *Strangers in Blood: Fur Trade Company Families in Indian Country* (Vancouver: University of British Columbia Press, 1980) がその代表作である。ブラウンと共編著(Jacqueline Peterson and Jennifer S.H. Brown eds., *The New Peoples: Being and Becoming Métis* [Winnipeg: University of Manitoba Press, 1985])があるジャクリーン・ピーターソンも、同様に女性の存在を重視して、宣教師との関わりで毛皮交易社会を検証してきた(Peterson, *Sacred*

Encounters: Father de Smet and the Indians of the Rocky Mountain West, Norman, Oklahoma: University of Oklahoma Press, 1993)。

ヴァン・カークの研究は、毛皮交易が西部の中心産業だった 1860 年代までを主たる対象にして、人種やジェンダーが社会に及ぼした影響を検討しているが、その視点を現代にまで広げた J.R. Miller, *Skyscrapers Hide the Heavens: A History of Indian-White Relations in Canada* (1989, 2000) も定評がある⁽²²⁾。

また、ヴァン・カークの関心を 1860 年代以後の農業定住社会に時を移して論じる一連の研究がある。たとえば白人女性が入植し始めた時期に先住民イメージが形成されていく様子や、先住民の一夫多妻制を禁じた過程を描くサラ・カーター (Sara Carter, *Capturing Women: The Manipulation of Cultural Imagery on the Prairie West*, Montreal: McGill-Queen's University Press, 1997 及び *The Importance of Being Monogamous: Marriage and Nation Building in Western Canada to 1915*, Edmonton: University of Alberta Press, 2008) がそれであるし⁽²³⁾、19 世紀から 20 世紀にかけて白人入植者が先住民に文化変容を迫る過程を共通テーマとしたアンソロジー、Myra Rutherdale and Katie Pickles eds., *Contact Zones: Aboriginal and Settler Women in Canada's Past* (Vancouver: University of British Columbia Press, 2005) も、その系譜である。

1980 年代以降変化しているのは、研究対象となる時代だけではない。たとえば、*Finding a Way to the Heart* の執筆者の 1 人、アデル・ペリー (Adele Perry, "Women, Gender, and Empire," in Philip Buckner, ed., *Canada and the British Empire*, London: Oxford University Press, 2008 ; *On the Edge of Empire: Gender, Race, and the Making of British Columbia*, Vancouver: University of British Columbia Press, 2001 など) は、国家の枠を超えてフェミニズム視点からの帝国史を描くべく毛皮交易者ダグラスやコナリーの一家を扱おうとしている。また、日本における「白人研究」と同様に人種などの境界線を扱う、Sheila McManus, *The Line Which Separates: Race, Gender, and the Making of the Alberta-Montana Borderlands* (Edmonton: University of Alberta Press, 2005) のような研究もみられる。地域史を超えたトランス・ナショナルなアプローチも、今後の潮流となるに違いない。

むすびに代えて

本稿は、北米先住民や毛皮交易に関する日本の先行研究を整理した後、北米については、主にカナダを中心に、先住民史と毛皮交易史の領域におけるシルヴィア・ヴァン・カークの影響や、その後の研究動向を説明してきた。日本については、歴史に限定した場合に取り上げるべき研究がきわめて限定されるし、以後、この領域の論考を進める際に、人類学を中心とする他領域の研究動向を踏まえる必要があるからである。他方、北米については、他の研究領域を含めれば、あまりにも膨大すぎて手に余るし、むしろヴァン・カークの研究の影響に焦点が当たるように、このような限定の仕方をした。そのいずれについても、あるいは重要な研究を見逃している可能性を恐れるが、一応の研究史の見取り図が示せたのではないかと考えている。

ヴァン・カークは、先住民史の研究者であると同時に、毛皮交易史、女性史、社会史の分野でも、研究史上無視できない存在である。そんな彼女を研究史上に位置づける作業は容易ではないし、全く違った書き方ができるかもしれない。本論では部分的にしか触れなかったが、ヴァン・カークは、博士論文では毛皮交易史の専門家リッチの査読を受け、書籍化に際してはヌーヴェル・フランス史の研究者ウィリアム・エクルズ (William J. Eccles) の指南を受けた。ハドソン湾会社の公文書館に籠っている頃から、ブラウンと盟友であり、*Finding a Way to the Heart* の執筆者 (たとえばコリネクは修士の教え子、アデル・ペリーの博論外部審査員、ロバート・イネス [Robert Alexander Innes] は学部の教え子) を含め、多くの後進に影響を及ぼした。研究内容では新たな道を切り拓いた彼女も、歴史研究者の「ムラ」で成長してきた1人であり、あるいは、そうした人間関係を辿ることで違った研究史が描けるのかもしれない。

ともあれ、『優しい絆』の内容が、かろうじて木村の『カナとビーヴァーの帝国』で触れられたのみで、日本の研究世界で全く無視されてきた状況は残念であるし、カナダ先住民史研究者層の薄さの現われと言わざるを得ない。カナダでは、ヴァン・カークを出発点とする30年余りの間に研究が多様化した。今後ますます地域史を超えたトランス・ナショナルな取り組みも増えてくるだろう。日本の歴史研究も、その影響を受けながら多様化していく余地が残されている。毛皮交易史は、まだまだ興味深いテーマを数多内包してい

るのである。

後記

筆者は現在『優しい絆』の翻訳(故・木村和男との共訳)に関わっており、それは2014年秋までには麗澤大学出版会から刊行される予定である。本稿は、1980年に刊行された原著を30余年後の現在とつなぎながら、その意義を再確認する目的で執筆した。なお、ここで提示した内容が、訳書の中でもまえがき、あとがき、補遺などで形を変えながら提示される点をお断りしておきたい。

注

- (1) フォーラムのチェアはジェニファー・ブラウン (Jennifer S.H. Brown)。プログラム上はイアコベッタの名前は出て来ないが、後述するアンソロジーで、このラウンドテーブル開催の経緯などについても触れられている。なお、大会プログラムはCHAサイトの次の頁を参照
<http://www.cha-shc.ca/english/what-we-do/annual-meeting/2007-cha-annual-meeting-saskatoon-university-of-saskatchewan.html#sthash.AHuY9Ibp.dpbs>
(2014年3月16日閲覧)
- (2) Robin Jarvis Brownlie and Valerie J. Korinek eds., *Finding a Way to the Heart: Feminist Writing on Aboriginal and Women's History in Canada* (Winnipeg: University of Manitoba Press, 2012), 4.
- (3) 後記で示したとおり、現在本書の翻訳刊行に向けた作業が進行中である。『多くの優しい絆』は直訳調で座りが悪いため、訳書タイトルは『優しい絆』とする予定である。同書は1980年には、“Women in Fur-Trade Society in Western Canada, 1670-1870”の副題で Watson & Dwyer 社から刊行されたが、同社廃業後、著作権は J. Shillingford Publisher に移り、1999年と2011年に新版で刊行されている。新版では、旧版に含まれていた図版が全て削除されている。
- (4) Sylvia Van Kirk, *Many Tender Ties* (Winnipeg: J. Shillingford Publisher, 2011), 13.

- (5) “‘All These Stories about Women’: ‘Many Tender Ties’ and a New Fur Trade History,” (in Brownlie and Valerie, eds., *Finding a Way to the Heart*), 28.
- (6) 長年カナダ史学の主流だったハロルド・イニス (Harold Innis) やドナルド・クレイトン (Donald Creighton) らの「ローレンシア学派 (Laurentian School)」の理論や、その系論である「中心と周辺理論 (Metropolitan-Hinterland Thesis)」については、たとえば、R. Douglas Francis, “The Writing of Canadian History: The Need for a New Perspective,” 『つくばカナダ・セミナー報告集』第2号 (つくばカナダ・セミナー実行委員会、1991年) 及び同誌上の拙訳「カナダ史の方法をめぐって—新しい視角の必要性」など参照。
- (7) 日本の人類学界の重鎮だった故・綾部恒雄には、カナダについても編著がある。自身は北米先住民研究には直接関与していないが、たとえば綾部編『カナダ民族文化の研究：多文化主義とエスニシティ』(刀水書房、1988年)にも先住民についての論考が掲載されている。スチュアート・ヘンリは、アイヌから北米先住民まで広く扱う人類学者で、イヌイト (イヌイト) についての論考も見られる(たとえば編著『「野生」の誕生』世界思想社、2003年)。歴史家・富田虎男については後述する。
- (8) 新聞記者だった本多が現地でイヌイトと共に暮らした生活ルポ。なお、時代が下って、同じく研究書ではないが、写真家・星野道夫の本(たとえば『森と氷河と鯨：ワタリガラスの伝説を求めて』[世界文化社、1996年])も、先住民の世界観を日本人に紹介する上で一定の役割を果たしてきた。
- (9) 岸上伸啓『イヌイト：「極北の狩猟民」のいま』(中公新書、2005年)、9-11頁。
- (10) 省名については、連邦アイデンティティ・プログラムに基づき、2011年以降、先住民問題・北方開発省 (Aboriginal Affairs and Northern Development Canada) が通常使用されている。その改正は、「ファースト・ネイションズ (インディアン)」だけではなくメイティやイヌイトに対しても同省に責任がある点を示す意味もあった。カナダ政府先住民問題・北方開発省サイト
<<http://www.aadnc-aandc.gc.ca/eng/1314808945787/1314809172051>>(2014年3月17日閲覧)
- (11) 毛皮交易者の白人男性と先住民女性の混血の子孫をメイティもしくはメ

ティスと呼ぶ。「もともとフランス語の *metis* (混血者) に由来しており、『メティス』ともいわれてきたが、今日のカナダではフランス語のアクサンをつけず、大文字の定冠詞つきでメイティと呼ぶのが一般的である。」木村和男「メイティ——カナダの混血先住民」(綾部恒雄他編『講座世界の先住民民族 ファースト・ピープルの現在 07 北米』明石書店、2005年)、340頁。

- (12) やや異色なところでは、イヌイットの若者との交流から、彼らの現状を等身大に描いた磯貝日月『蒼いお尻のぼくときみ——カナダ極北のイヌイット 内なる心の旅』(清水弘文堂書房、2007年)などもある。
- (13) 広瀬健一郎「連邦政府の先住民教育制度」(小林順子他編著『21世紀にはばたくカナダの教育』東信堂、2003年)他多数；平田淳も制度面から先住民教育についての研究に取りかかっている。平田淳「ユーコン準州における学校協議会と保障代表制度——先住民の学校運営参加に関する一考察」(2013年9月、日本カナダ学会第38回年次大会〔於神田外語大学〕での報告)
- (14) 木村和男「毛皮交易から生まれた『新しい民族』——カナダの混血先住民メイティの誕生——」『歴史と地理』539号(山川出版社、2001年11月)、1頁。後でヴァン・カークに対する批判について触れるが、それと同様に、ロマンチックでセンチメンタルに過ぎる見方だと評することも可能かもしれない。その後メイティが味わった苦難を考えれば、その前提となった現地婚を肯定的にみるのは、少なくとも先住民が望む議論ではあるまい。とはいえ、毛皮交易者の多くが現地婚の先住民女性との関係を大切にされた事実を軽視するのも間違いであろう。
- (15) 中核的な研究者は、藤川隆男(大阪大学)。藤川編著『白人とは何か？——ホワイトネス・スタディーズ入門』(刀水書房、2005年)など。
- (16) Sleeper-Smith, *Rethinking the Fur Trade*, xx.
- (17) Skinner, "Review of *Rethinking the Fur Trade: Cultures of Exchange in an Atlantic World*," Illinois Mathematics and Science Academy DigitalCommons@IMSA, 10-1-2010
http://digitalcommons.imsa.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1001&context=hs_s_pr (2014年3月17日閲覧)
- (18) Brownlie and Korinek, *Finding a Way to the Heart*, 31.

- (19) Ibid., 8.
- (20) Ibid., 7.
- (21) ジェイムソンは、本稿がここまでで紹介したヴァン・カークやブラウン、ピーターソンらと共に、1970年代に国境を超えてアメリカ合衆国の研究者と共同研究を進めた人物として、アーサー・レイ (Arthur Ray)、ジョン・フォスター (John Foster)、ウィリアム・スワガーティ (William Swagarty) らの名前を挙げている。
- (22) その初版について、オールドリッジの評価は手厳しい。曰く、特に戦後部分についての説明が弱いという。Jim Aldridge, "Skyscrapers Hide the Heavens: A History of Indian-White Relations in Canada by J.R. Miller," *BC Studies*, No.87, Autumn 1990) 94-7. なお、ミラーの論考は、ダグラス・フランシス、木村和男編著『カナダの地域と民族』(同文館、1993年)の1章として、日本語で読むことができる。「第7章 北部と先住民」223-55頁。
- (23) 筆者は、日本カナダ学会西部カナダ学際研究ユニットで、カーターの著作を学ぶ機会を得た。筆者の書評発表としては、「書評：サラ・カーター『女性の捕虜化：カナダ西部平原地域における文化的イメージの操作』(McGill-Queen's Press, 1997)」(日本カナダ学会西部カナダ学際研究ユニット研究会、2009年12月1日、於麗澤大学東京研究センター)がある。同ユニットの報告集には、小野寺和子による書評が掲載されている。小野寺「書評：平原カナダにおける多様な婚姻形態とキリスト教 Sarah Carter, *The Importance of Being Monogamous: Marriage and Nation Building in Western Canada to 1915*」(日本カナダ学会西部カナダ学際研究ユニット編『平原カナダの研究：2006-2011年度の研究成果』2012年5月)、159-61頁。